

名称	読み方	数量	材質等	時代	解説	
1章 昔のくらし						
1	番傘	ばんがさ	1本	紙（和紙）/木製	昭和	番傘は和紙や竹、木を使って作られた日本古来の傘です。和紙に油を塗ることで、水をはじいて雨傘として使用するようになりました。
2	湯たんぽ	ゆたんぽ	2点	ブリキ製/陶製	昭和	ゆたんぽは、中国で今から1400年前ころから使われていたそうです。日本では600年前室町時代から使われていたそうです。陶製は江戸時代から使用し、ブリキ製は大正時代頃から使用されていました。現在は様々な材料から作られています。陶製の特徴は、熱が逃げないため、朝まで熱を保つことができ、ブリキ製は熱伝導が高く、すぐにからだを温められます。
3	回転こたつ	かいてんこたつ	1台	鉄製/木製	昭和	かごの中の鉄箱に炭を入れ、ふとんをかけて足もとをあたためました。箱が回転するようになっているため、足が当たっても炭がこぼれることなく安全に使用できる工夫がされています。電気こたつが普及する昭和30年代まで使われました。
4	電気あんか	でんきあんか	1台	金属製 （ナショナル（現・パナソニック）製）	昭和	昭和30年代になって電気が普及すると、電気でふとんの足もとをあたためる、「あんか」が登場しました。湯たんぽと違い、電気を使用するため、冷めることなく寝ている間中暖かいまま使えます。
5	扇風機	せんふうき	1台	金属製 （芝浦製作所/現・東芝製）	昭和	電気扇風機は、1893（明治26）年に初めて輸入されました。その後、研究を重ねて、日本初の国産扇風機を開発したのが芝浦製作所。現在の東芝になります。何度かの改良を重ね、様々な機能を持つ扇風機が登場しています。
6	蚊取り線香	かとりせんこう	1点	紙製（箱）	明治	蚊取り線香の原料になる除虫菊という植物は、1886（明治18）年にアメリカから日本に輸入されました。日本ですぐに栽培が始まり、1890（明治23）年には、棒状の蚊取り線香が開発されました。しかし棒状ではわずかに60分しか燃えず、燃焼時間を延ばすため、渦巻型が開発されました。
7	ラジオ「CONDOR」	らじお「こんどる」	1台	木製 （三井物産会社製）	昭和	「CONDOR」（コンドル）という製品名で販売されていたラジオです。正面に付いている「つまみ」を回して使用します。一番左は【音量】、中央は【選局】、右側は回路を動かすための【再生】するためのものです。
8	8mmカメラ	8みりかめら	1台	金属製 （コダック社製）	昭和	このカメラは、1930年代からアメリカのコダック社が販売した「シネコダックエイトモデル60」です。中に8mmフィルムが入っており、ゼンマイの力で最長25秒の動画撮影ができました。また、販売当初はフィルムの値段を下げるため、今の様に音声も録音できる機能はありませんでした（サイレント形式）。
9	映写機	えいしゃき	1台	金属製 （シーメンス社製）	昭和	ドイツのシーメンス社製の映写機（映画を映すための機械）です。8mmカメラで撮影したフィルムの動画をみることができます。8mmカメラとは元々家庭用で使用する為として発売され、多くの人が映像の撮影を楽しめるようになりました。
10	電話（黒電話） ※600型電話機	でんわ（くろでんわ）	1台	塩化ビニール他 （沖電気工業製）	昭和	家庭用電話として、どの家庭にもあったダイヤル式の「黒電話」です。1980年代頃からFAX付きの電話や1990年代の携帯（けいたい）電話の普及により、次第に姿を消していききましたが、今でも【電話】というと、黒電話のようなマークを数多く見かけます。
11	そろばん（算盤）	そろばん	1台	木製	昭和	そろばん（算盤）は、計算をするための道具で、古代の中国で使用され、日本では約600年前頃から使われているといわれます。
12	計算機	けいさんき	1台	金属 他 （日本計算機社製）	昭和	やがて、計算機が登場し、展示しているものは、日本初の国産化に成功した、日本計算機社製のもので、たし算・ひき算以外にも、様々な計算ができる機能を備えています。1970年頃から、小型電卓が流通し、姿を消していきました。
13	計り	はかり	1台	金属 他	昭和	テコの原理(げんり)を利用して、物の重さを計ります。おもりの位置(いち)を変えることで、計りたい重さを調整(ちょうせい)しました。
14	蓄音機	ちくおんき	1台	木製（コロンビア社製）	昭和	蓄音機は有名なエジソンが発明した物として有名です。横のハンドルでゼンマイを巻き、その力でレコードを回します。針に伝わった音は箱の中の金属のパイプを通り、大きな音を生み出します。
15	テープレコーダー GT-630	てーぶれこーだー	1台	プラスチック他 （東芝製）	昭和	テープレコーダーは、録音するための機械です。この製品は1965（昭和40）年頃の製品です。1950年に東京通信工業（現・ソニー）が、販売を始めてから、この機械の一般家庭への普及がはじまり、自分の声を録音したり、ラジオ番組を録音することなどを楽しめる様になりました。
16	トランジスタテレビ	とらんじすたてれび	1台	プラスチック他 （ソニー製）	昭和	トランジスタテレビとは、ソニーが1960（昭和35）年に世界で初めて開発した、従来よりも小型で持ち運びができるテレビです。このテレビは1970年代頃に発売されました。
17	リードオルガン	りーどおるがん	1台	木製（ヤマハ製）	昭和	「足踏みオルガン」とも呼ばれる様に、足でペダルを踏んで、風を送ることで音が出ます。元々はキリスト教の教会で聖歌を歌うために造られた巨大な「パイプオルガン」で、小型化されて一般家庭にも普及していきました。
芦屋の「くらし」						
18	精道村消防組装束	せいどうむらしょうぼうくみしょうぞく	2着	木綿	昭和	消防組は、それぞれの地域で消防活動を行う人たちです。現在の「消防団」に当たります。消防組の歴史は古く、江戸時代に町火消として消防活動を行っていた集団が元といわれています。
19	仕立師道具	したてしどうぐ	一式		大正～昭和	服をつくる「仕立師」の道具です。
20	シンガーミシン	しんがーみしん	1台	木製・金属製	大正頃	1920年頃に日本に輸入されたとされるミシンです。ミシンは1910年代に急速に普及していきました。
21	打出焼	うちでやき		陶製	昭和	芦屋市打出にて、「打出焼」と呼ばれた焼物を生産していました。打出の土質に着目した齊藤幾太が1909(明治42)年に窯を開き、後に阪口砂山(初代)に継承されました。茶器、花器他、とっくりなど様々な焼物が製作され、地元を中心に人気があったそうです。2代砂山まで続きましたが、昭和40年頃に生産が中止されたそうです。
22	文机	ふづくえ	1台	木製	大正頃	山芦屋のお宅にあったもの。和歌があしらわれています。

名称	読み方	数量	材質等	時代	解説	
2章 昔の「食」						
23	一斗枴	いっとます	1口	木製	大正	中にお米やお酒などを入れて量(りょう)を計るものです。枴の大きさは、以下の通りです。 「半升(はんしょう)」枴(0.9リットル)、「一升(いっしょう)」枴(1.8リットル)、「一斗(いっとう)」枴(18リットル)
24	枴	ます	2口	木製	大正	※半升(0.9リットル)=牛乳パック約1本分
25	七輪	しちりん	1口	陶製	昭和	中に火をおこした炭を入れて網の上で、魚などを焼いていました。珪藻土という材質が使われているものが多く、外に熱が逃げないため、少ない燃料で調理ができます。また、外に熱が伝わりにくくなっているため、持ち運びも便利です。
26	膳	ぜん	1脚	木製漆塗	昭和	食事のためにととのえられた料理をのせる台で、一人分の食物や食器などをのせて、一人ひとりに提供されます。多くは漆(うるし)塗りで、多くは脚が付いています。
27	ちゃぶ台	ちゃぶだい	1台	木製	昭和	数人ですわって食事をする時に囲む台です。「ちゃぶ」とは、漢字では「卓袱」と書き、これの中国読み「チョーフー」からきているともいわれます。明治時代から配膳に代わって普及して行きました。
28	石臼	いしうす	1基	石製		芦屋川には、数多くの水車がありました。その水車を利用して、菜種油やお酒造り用のお米の精米、そうめんが作られていました。この石臼は、その水車で利用されていたものです。水車は昭和20年頃になるとなくなります。この石臼は山芦屋町で家の石垣として利用されていたものです。
29	唐箕	とうみ	1台	木製		脱穀したお米を唐箕の中に入れ手動で風を起こし、もみ殻、玄米などに選別するための器具です。実の詰(つ)まったものは一番手前の穴に落ち、もみ粕など軽いものは外に吹(ふ)き飛んでいきます。現代でも、ほぼ同じ構造でお米を選別しているほど、大変優れた技術です。
30	羽釜	はがま	1口	鉄製	昭和	茶を沸かしたり、お米を炊く際に使用される釜です。吹きこぼれないように、重い木のフタを上に乗せます。現在は炊飯器の普及によって見かけることは少なくなりましたが、より性能の良い羽釜も開発されています。
31	おひつ	おひつ	1合	木製	昭和	羽釜で炊いたごはんをこの中に入れて保温(ほおん)していました。檜(ひのき)で作られ、余分(よぶん)な水分をとり、ごはんが蒸れるのを防ぎます。
32	電気炊飯器	すいはんき	1台	金属製 (ナショナル(現・パナソニック)製)	昭和	羽釜を使い、かまどで炊いていたごはんを、電気力でスイッチひとつでテーブルの上でも炊けるようになりました。今では、羽釜とおひつの両方の役割(炊飯と保温)をもっている、ジャー炊飯器が普及しています。
33	トースター	とーすたー	2台	金属製 (東芝製)	昭和	トースターが登場した頃は、両側のふたがあき、パンを片面ずつ焼く道具でした。この道具がもっと便利(べんり)になったのが「両面焼き」式のトースターで、パンが焼きあがると自動ではね上がります(ポップアップ式)。
3章 昔の「あそび」						
34	百人一首	ひやくにんいっしゅ	1組	紙製 (箱は木製)		百人一首は、本来は100人の和歌を選んだものを言いますが、現在、百人一首と言われると、藤原定家という人が選んだ「小倉百人一首」を指す事が多いです。「57577」に区分けされ、「575」を上、の句、「77」を下、の句に分け、かるたでは下の句の札を取り合います。
35	大阪張子(馬)	おおさかはりこ(うま)	1点	紙製		大阪張子とは、江戸時代から大阪で製作された、紙で作られた立体のおもちゃです。他にも虎、だるまなどの種類があり、魔除けや置物として親しまれています。現在も大阪府柏原市を中心に生産されています。
36	貝合せ	かいあわせ	1組	貝、塗料		絵が描かれた、ハマグリの貝殻の内側を揃えるという、トランプの神経衰弱のような遊びです。ハマグリの貝殻は他の物とは重なり合わない特徴があり、それが転じて「結婚」の嫁入り道具としても使用されたそうです。
37	伏見土人形	ふしみつちにんぎょう	1点	土製(陶製)		名前の通り京都の伏見で作られた土の人形で、日本全国にある土人形は、この伏見からはじまったと言われていています。その地域の伝説や、着ていたものなどを基につくられています。
38	伏見土人形 (大日寺の牛)	ふしみつちにんぎょう (だいにちじのうし)	1点	土製(陶製)		大日寺は明泉寺といい神戸市にあるお寺です。大日の名前の通り、ご本尊の「大日如来」は牛との関わりが深く「牛の寺」として信仰を集めていました。
39	住吉土人形 (虚無僧人形)	すみよしつちにんぎょう (こむそうにんぎょう)	1点	土製(陶製)		住吉土人形は、伏見土人形の影響を受け、江戸時代の終わりころから、大阪の住吉大社付近で製作がはじまりました。伏見と比べると比較的小さいものが多いのが特徴です。虚無僧の人形は船酔いのまじないとされていたそうです。
40	住吉土人形 (饅頭喰人形)	すみよしつちにんぎょう (まんじゅうくいにんぎょう)	1点	土製(陶製)		饅頭喰人形は、「父と母どちらが好きか?」と聞かれた子供が、饅頭を2つに割って「どちらが美味しいか?」と聞き返したお話が基で、知恵のある子どもを授かるためのお守りとして各地で作られました。
41	住吉土人形 (鯛の香盒)	すみよしつちにんぎょう (たいのこうごう)	1点	土製(陶製)		香盒(香合)とは、香物を入れるためのもので、おめでたいという意味で魚の「鯛」の香盒が製作されたそうです。
42	愛宕の人形硯	あたごのにんぎょうすずり	1点	石製		京都の嵯峨野付近でとれる柔らかい石を使ってつくられた硯です。歴史上の人物や動物などの硯があり、愛宕神社の参拝客のお土産として売られていたそうです。
43	稲畑土人形	いなはたつちにんぎょう	1点	土製(陶製)		兵庫県の氷上郡(現・丹波市)で作られた土人形です。江戸時代の終わり頃から作られ、明治時代には皇族にも贈られるなど、名声がありました。現在も、丹波地方の工芸品として技術が継承されています。
44	羽子板	はごいた	4点	木、布 他		羽子板は、羽根つきの遊びとして使われるほか、生まれたばかりの女児が初めてお正月を迎える際に、邪気を払って美しく成長する事を願って製作をされました。
45	木製玩具 (ピンボール)	もくせいがんぐ	1組	木製		
46	木製玩具 (ポーリング)	もくせいがんぐ	1組	木製		
47	木製玩具(車と橋)	もくせいがんぐ	1組	木製		
48	ブリキ製玩具 (こだま号)	ぶりきせいがんぐ	1点	ブリキ製	昭和	「こだま号」は、東京～大阪間の特急電車として、1958年～1964年の間に運行していました。「こだま」の名前は全国からの応募で決定しました。1964年に新幹線が開通すると、この特急電車に代わって、新幹線が「こだま」を名乗るようになりました。
49	ブリキ製玩具 (パトカー)	ぶりきせいがんぐ	1点	ブリキ製	昭和	左ハンドルで、アメリカのフォード社製のパトカーのおもちゃです。